

地域との対話さらに必要 大津、障害者差別考えるシンポ

障害者差別のない地域づくりを考えるシンポジウムが16日、大津市浜大津4丁目の明日都浜大津で開かれた。市内の障害者や支援者らが、7月に起きた相模原市の障害者殺傷事件の影響や、地域との対話の重要性について意見を交わした。

市障害者自立支援協議会などが開いた。会場では、市内で知的障害者の生活介護拠点を計画した際、住民から「相模原のように事件に巻き込まれる」「職員が事件を起こすのではないかと」、事件を理由に反対されたケースが報告された。

知的障害のある人の家族でつくる「全国手をつなぐ育成会連合会」(大津市)の久保厚子会長は「事件で、人の心の中にまだバリアがあると再確認させられた。障害にかかわらず、名前を持った一人の人間と認められるようにしないといけない」と強調した。

市ろうあ福祉協会の石野富志三郎会長は、東京のホテルで宿泊客のクレームでテレビの字幕表示が見られない設定にされた事例を紹介し、「障害者を排除しようという戦前の考えが70年以上も続いていることが残念」と、障害への理解を訴えた。

登壇者や参加者100人は差別解消を促す市条例の策定を訴えたほか、障害者と地域住民がともに生活で困っている点を話し合うことで、安心して暮らせる大津にしていくことを確認した。



障害者差別解消に向けた取り組みや相模原事件の感想が話し合われたシンポジウム(大津市浜大津4丁目・明日都浜大津)

【2016年12月16日 22時37分】

Copyright (c) 1996-2016 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd. All rights reserved.

各ページの記事・写真は転用を禁じます。著作権は京都新聞社ならびに一部共同通信社に帰属します。[ネットワーク上の著作権について](#) [新聞・通信社が発信する情報をご利用の皆様へ](#)(日本新聞協会) [電子メディアおよび関連事業における個人情報の取り扱いについて](#)